俳句同好会

星野文化委員

七月下旬を目標に俳句同好会例会を予定し、兼題を新谷幹事にお願いしていましたが、皆々様多忙のため、一所に会することができず、ファクシミリによる投句・選句になりました。一応これを第十四回とし、十月には協会事務所にて、十一月には吟行にて開催することができましたので報告させて戴きます。

（第十四回）　ファックス句会・七月下旬

兼題『雲の峰』『糸とんぼ』『合歓の花』と季節雑詠

幹事　新谷景流

捨舟に　雨たまりけり　雲の峰　一義
川とんぼ　笹の葉露に　時刻む　景流
京の町　鉾見おろして　雲の峰　生雄
大佛の　鴟尾輝きて　雲の峰　生雄
そよ風に　つと飛立ちし　糸とんぼ　生雄
首かしげ　何処へ往かむ　糸蜻蛉　白楊
糸とんぼ　空中にても　翅休む　景流
合歓の花　妖しきまでに　暮れなずむ　景流
夕闇の　迫る里路に　合歓ほのか　景流
薄幸の　女踞みて　糸とんぼ　景流
宴はて、　足どり重し　もどり梅雨　紫杏
打水に　宿なし犬や　追われけり　生雄
白壁に　昔庄屋の　夏館　生雄

（第十五回）　於：協会事務所　十月十三日

兼題『すゝき』『葉鶏頭』『百舌鳥』『夜長』『夜寒』『落鮎』『牡蠣』『花野』『木犀』と季節雑詠

幹事　久保白楊

入り日射す　百舌鳥の贄刺　干涸びて　生雄
竹の春　尊き人の　老い給う　治吉
涯しなき　花野に絮の　舞いかゝる　景流
篝火や　夜寒にシテの　床踏める　白楊
野のうねり　すゝき一叢　昏れのこる　紫杏
かき料理　始めましたと　便り来る　生雄
ひと年を　おえる流れや　下り鮎　生雄
葉鶏頭　のびてのぞけり　子供部屋　紫杏
つま先を　布団にくるむ　夜寒かな　治吉
牡蠣フライ　さめし食卓　残し文　紫杏
鳶一羽　芒の波に　おつる声　白楊
救急車　遠ざかり往く　夜長かな　白楊
草庵に　緋色に萠ゆる　葉鶏頭　生雄
街路樹の　側にすっくと　葉鶏頭　松蔵
かまつかに　はぐれ白猫　かくれけり　白楊
音もなく　木犀の花　こぼれけり　生雄

（第十六回）　於：パークホテル　十一月十五日

吟行『京都国立博物館・智積院とその附近』

幹事　星野紫杏

銀杏散る　石塔陰を　ひろいけり　白楊
紅葉入れ　ロダンも入れて　押すシャッター　生雄
野仏を　置きて冬陽を　添えにけり　白楊
裏表　見せつゝ　落葉　吹かれけり　白楊
白塀に　紅葉も映ゆる　智積院　生雄
異人皆　黙す冬日の　御仏に　白楊
蓮は　池面のもみじ　片に寄せ　紫杏
落葉踏む　音数えつつ　独りなり　白楊
昏れかゝる　苑の片隅　木の実降る　景流
ならぶ子と　話す和尚に　木の実降る　陵南
人去りて　智積の庭に　石蕗の花　陵南
「考える人」に　落葉の　吹きよれる　白楊
冬窓に　唐三彩の　ほゝ笑める　白楊
暮るまで　風な散らしそ　終紅葉　紫杏
考える　ロダンの彫塑　はだ寒し　紫杏
老松の　菰腰高に　冬を待つ　生雄
冬めきて　博物館の仏達　白楊
不動明王　桜紅葉に　立たまう　生雄
大銀杏　落葉しぐれに　日もすがら　景流
バス降りて　銀杏並木の　道を行く　月耕
かげり陽に　一入さえる　櫨の紅　紫杏

俳句同好会

星野　紫杏

昨年秋の十一月十五日に『京都国立博物館・知積院とその附近』にて吟行による句会を開きました。その折に新年度の兼題として、『年末・年始』を詠み込んだものと決めていましたが、皆様それぞれ多忙のため、第十七回句会を二月十八日に、協会事務所にて開催致しました。引続いて二回の吟行を含め七月には第二十一回句会を催すことが出来ましたので報告申し上げます。

（第十七回）　於：協会事務所

幹事　新谷景流

兼題『年末・年始』に関りのあるもの

おさな孫　まねて口紅　初鏡　生雄

兼題『冴える』『ゆりかもめ』『寒』

納骨に　寒煙のぼり　鐘の音　治吉

冴えかえる　石部小路に　ポクリかな　四朗

看経の　鉦の途絶えし　寒さかな　白楊

川面みて　また人を見て　ゆりかもめ　四朗

煮込まれて　丸ごと店に　寒の鯉　生雄

並びいて　一羽背むきし　都鳥　白楊

冬ぬくし　篠つく雨の　降り止まず　景流

冴え返る　夜の心拍を　数えおり　白楊

（第十八回）　於：岡崎　そばの『権太呂』

幹事　久保白楊

平成元年三月三十日

兼題『春雷』『都おどり』『鳥雲に入る』『春眠』『こぶし』

畦道を　葬列つづく　鳥雲に　景流

春雷や　寝そべりて誌む　三国志　陵南

路次の奥　古き火鉢に　咲くこぶし　松蔵

ささ濁る　疎水に花も　映ささる　白楊

一輪の　辛夷を避けて　車出す　陵南

春雷に　目覚める庭の　芽ぐむもの　景流

教会の　庭に辛夷の　白さかな　陵南

春雷や　いささか酔うて　湖の宿　陵南

春眠や　投遣ざまに　寺の猫　生雄

春霖に　烟る大樹や　鳩吐けり　景流

吟行『平安神宮内苑と岡崎近辺』

水に沿ひ　桜に沿ひて　巡りけり　白楊

春昼や　園丁苔に　水撒けり　景流

暮れ残る　山脈に浮く　桜かな　白楊

紅枝垂　蕾のままの　紅さかな　紫杏

写真師の　媼桜下に　読書して　白楊

揺れもせぬ　枝垂桜の　水面かな　白楊

席題『そば』『山』『植木』『巫女』

桜めで　たすき娘の　そば料理　陵南

山笑う　囁き集め　小川滝　白楊

春うらら　副木をきびる　植木職　紫杏

春風や　巫女のささやき　出番待ち　紫杏

植木屋の　背一杯の　春陽ざし　紫杏

灯の暗き　そばやの句座や　春暮るる　白楊

植木屋の　知らぬ花あり　神の苑　白楊

緋袴の　巫女つれだちて　花の下　白楊

暮れなずむ　そば屋の庭に　柳の芽　紫杏

（第十九回）　於：協会事務所

幹事　新谷景流

平成元年五月二十三日

兼題『時鳥』『新茶』『牡丹』『柏餅』『袋角』当季雑詠

苞にして　置き忘れ来し　柏餅　白楊

子等は来ず　夕飼の卓に　柏餅　陵南

子等去りて　祝うことなき　柏餅　生雄

母の忌や　真白き牡丹　くずれ散る　月耕

宇治老舗　新茶の籘を　なびかせり　景流

宅配に　詫し恩師へ　新茶出す　陵南

到来の　新茶とともに　嫁を褒め　四朗

駄菓子には　新茶と主　念押せる　白楊

欠け茶碗　捨てかねてまた　新茶汲む　紫杏

時鳥　倦みし書を置く　区切とす　白楊

通夜の雨　話途絶えし　時鳥　白楊

こわごわに　触るればぬくき　袋角　紫杏

ぬきん出て　伸びる一本　夏わらび　生雄

世をすねる　筍まがり　商はる　生雄

（第二十回）　於：『花ことば』

幹事　星野紫杏

平成元年六月二十二日

兼題『あじさい』『みなづき』『うきくさ』『水すまし』『蝸牛』

うき草や　風吹くままに　片寄れり　生雄
かたつむり　嵯峨野の雨を　たどりけり　白楊
浮草は　畦越す水に　流れけり　紫杏
うき草と　泥をつけたる　跳先かな　景流
照りつける　無人の駅や　玄葵　生雄
雨ぽつり　あめんぼ横に　走りけり　白楊
植終る　田に白鷺の　影映し　生雄
夕暮れて　花あじさいの　色分かず　紫杏

吟行『金閣寺・わら天神付近』

青楓　参道掩う　鹿苑寺　景流
沙羅の花　咲きたる午後の　雨近し　景流
近寄れば　沙羅の花落つ　鹿苑寺　生雄
鈴の緒の　垢にためらう　梅雨社　白楊
雨呼ぶか　汀に群る　水馬　景流

（第二十一回）　於：協会事務所

幹事　久保白楊

平成元年七月十七日

当季雑詠『山門』『橋』『眼鏡』『駅』

あじさいの　花の汚れし　無人駅　陵南
山門の　金剛力士　梅雨じめり　景流
無人駅　降り立つ客の　日傘映ゆ　景流
彩なせる　橋弁慶や　宵の宮　景流
山門の　汗拭く人に　会釋さる　白楊
駅裏の　茄子もぐ人や　汽車間遠　白楊

次回は九月に協会事務所にて開催の予定ですが、日は未定、幹事は石崎陵南担当にて、兼題は『桔梗』『雨月』『夜なが』『みのむし』『秋茄子』です。一般協会員の皆様から、ファクシミリによる投句参加をお待ちしています。

俳句同好会

協会 俳句同好会
平成元年11月７日㈫
於：左京区禅林寺山内
松岳院 選句会場

星野紫杏

俳句同好会も回を重ねて第二十四回を持つことが出来ました。かつて私が京電協会報に歴史シリーズの一端として俳句の起源とその進展について三回執筆させて戴きましたが、読んで下さった方が三パーセントに満たない現実に落胆し、投げ出したのも過去のこととなり、ただ今では同好会まで出来て、愛好者の一人として幸せこれに尽きるものはありません。

（第二十二回）　於：協会事務所
九月二十九日
兼題『夜長』『桔梗』『秋茄子』『雨月』
『みのむし』と季節雑詠

秋なすを　かゝえ果なき　立話　一義
代金箱　置かれ秋茄子　三百円　景流
祭壇の　灯しまばたく　雨月かな　生雄
秋茄子や　紺にひかれて　絵筆とり　陵南
添えられし　桔梗一輪　旅の膳　紫杏
雨宿る　無住の寺の　桔梗かな　白楊
二つ三つ　とりし蓑虫　もてあまし　白楊
窓一杯　夜の海あり　秋の宿　紫杏
枝打ちて　明るくなりぬ　庭の秋　生雄
倒れたる　桔梗先だけ　起きて咲き　紫杏
碁仇は　不在なりしか　夜長し　一義

（第二十三回）　於：協会事務所
十月二十一日
兼題『秋深し』『赤い羽根』『松茸』『栗』
『紅葉』と季節雑詠

赤い羽根　ネクタイ更えて　門を出る　陵南
秋深き　丹の色冴えし　門くぐる　白楊
こゝまでは　しぶき及ばず　谷紅葉　一義
窓ぎわの　秋の入日を　膝にのせ　生雄
松茸や　石突き少し　落しけり　白楊
蹲に　延べし繊手の　照葉かな　白楊
松茸に　添えんと庭の　柚子を捥ぐ　白楊
赤い羽根　似合うガイドの　声はずむ　生雄

づっしりと　里の土産に　栗の籠　生雄
踏切の　向うに一すじ　曼珠沙華　月耕
秋さびて　友の訃報の　又一つ　治吉
茶柱の　立つ湯のみ持つ　秋深し　生雄
照る紅葉　池の汀に　燃え盛る　景流
御燈の　はためき消えし　夜寒かな　白楊
くしゃみして　作務衣の僧や　秋寒し　生雄
ここよりは　木犀つづく　屋敷街　月耕
香をまなべ　椀の松茸　うす味に　生雄
松茸の　香でたしかめる　出生地　四朗

（第二十四回）　於：禅林寺山内の松岳院
吟行『禅林寺永観堂とその附近』と季節雑詠
十一月七日

あくびして　庭掃く宮司　神の留守　生雄
せゝらぎの　水に流れる　初紅葉　陵南
杳底に　紅葉を拾う　にわか雨　紫杏
雨あがり　永観堂の　紅葉映ゆ　景流
杉三本　紅葉見おろし　堂を守る　景流
黄落に　重ねて紅葉　散り敷きぬ　白楊
住職の　墓石落葉の　中にあり　治吉
句座しづか　永観堂に　書時雨　景流
紅葉して　永観堂に　初時雨　生雄
遠来の客も　紅葉の　句座にあり　景流
堂内は　紅葉あかりに　灯のゆらぐ　景流

季節雑詠

掌に　大ぶり熟柿　ひんやりと　生雄
滝を背に　塔堂わずか　秋陽ざし　一義
菊晴れや　えらびし駒の　かけぬける　陵南

俳句同好会参加者

大和電設工業㈱　栩谷　四朗
同和電工㈱　林　治吉
光星電工㈱　久保　白楊
㈱淀電気水道工業所　田中　生雄
㈱オリヂナル電設　石崎　陵南
㈱トーエネック　新谷　景流
㈱トモエ屋　星野　紫杏
京都府電気工事工業組合　三木　一義
元事務局長　吹ノ戸月耕

次回一月の「兼題」は年末年始にかかわりのあるもので自由兼題とします。

俳句同好会

星野　紫杏

世間の好景気に支えられて電設業界も超多忙のため、句会を開催するのにその調整が思う様にならず、平成二年の新春以来句会を開くのが夏までに三回がやっとと言う結果になりました。しかも私が、日取りの調整をお願い致しながら、急用のため三回の内二回までの投句のみの参加となりましたことお詫び申し上げ、俳句同好会のまとめをお引受けすることで、お許し戴き度いと思います。

（第二十五回）　於：協会事務所　二月十六日
兼題『水菜』『初午』『寒』と季節雑詠

岩海苔の　汚れて憎し　座礁船　陵南
寒肥と　笑って老を　コップ酒　生雄
飛行雲　ビルの屋上　牛祭り　生雄
掻寄せし　宮参道の　よごれ雪　生雄
初午や　神楽の巫女の　なまめきて　白楊
本尊は　閉ざされしまゝ　寒の入り　紫杏
鹵にからむ　水菜に齢を　思い知り　紫杏
戦友会　地図買いて訪う　雪の町　紫杏
踏みい出す　新雪に一歩を　ためらいぬ　田中

（第二十六回）　於：協会事務所　五月九日
兼題『雨・水・川・河・沼・池・滝・橋』を詠み込んだ当季雑詠

滝しぶき　受けて若葉の　彩さえり　生雄
伝説の　悲恋の沼や　朧月　生雄
麗かや　病棟の窓　開けてあり　生雄
身をまかせ　芽柳風の　遊ぶまゝ　生雄
せゝらぎに　光さゝやき　春の水　生雄
楠若葉　雨後の甍に　風光る　景流
花篝（かがり）　連ねて渡す　祇園橋　景流
フララコに　嬰（やや）あやしおり　五月晴　景流
島に沿ひ　若葉に沿ひて　水脈（みお）光る　白楊
繋舟に　春灯伸びし　高瀬川　白楊
作り瀧　めぐりはばたく　子規（ほととぎす）　治吉
覆われて　辛夷（こぶし）若葉の　駅舎かな　月耕
橋下の　タンポポ少し　遅れ咲く　紫杏

（第二十七回）　於：協会事務所　六月二十八日
兼題『行々子』（葦切）『風薫る』『麦秋』『青蛙』『蠅（はえ）』『梅雨』季節雑詠

新ジャガの　到来品を　土間に置く　月耕
目覚めれば　車窓一杯　麦の秋　紫杏
葭切りの　来たり止まれる　屋形舟　陸南
跳び石の　青蛙見て　止めし足　白楊
ビヤガーデン　まだ暮れきらず　鳩の来る　紫杏
廃田の　中に一枚　麦の秋　白楊
僧一人　畦を近道　麦の秋　生雄
競い立ち　尺余に伸びて　松の芯　生雄
裸火に　蠅取りリボン　店無人　白楊
蹲の　柄杓に彩る　雨蛙　白楊
留守居昼　一つの蠅を　追わざりき　白楊
長電話　とぎれもせずに　梅雨に入る　生雄
五月雨て　とぎれ勝なる　通夜の客　紫杏
物憂さや　水門乾く　麦の秋　白楊
下腹を　叩いて見たる　衣更　生雄
鶏小舎も　音せず梅雨に　入りにけり　白楊
青蛙　可愛ゆきものよ　見てあかず　陵南

俳句同好会参加者

大和電設工業㈱　栩谷　四朗
同　和　電　工㈱　林　治吉
光　星　電　工㈱　久保　白楊
㈱淀電気水道工業所　田中　生雄
㈱オリジナル電設　石崎　陵南
㈱トーエネック　新谷　景流
㈱トモエ屋　星野　紫杏
京都府電気工事工業組合　三木　一義
元　事務局長　吹ノ戸月耕